

## JOMF 派遣医師便り (2017. 2)

### ◆マニラ◆

## 天才デカルト、死因は肺炎

マニラ日本人会診療所

菊地 宏久

ルネ・デカルト (1596~1650、フランス) といえば文科系の方は「哲学者」、理科系の方は「数学者・医学者」を思い起こすかもしれません。(彼の生きていた時代は日本では豊臣秀吉の時代から三代将軍徳川家光にかけて)

デカルトは私のあこがれの数学者の一人です。哲学ばかりでなく数学においても後世に大きな影響を与える多くの業績を残しています。特に“直交座標系”の基礎を構築したり、“負の数”(マイナス)の概念をヨーロッパに導入したことは有名です。彼の数学における業績はその後のニュートンやライプニッツによる微分積分解析学の構築、幾何学、代数学、自然科学の発展に大きく寄与しました。

デカルトの数学における業績を述べるだけでも何年も要するほどですが、ここではそれを述べるわけではありません。彼の死について興味ある内容が書かれていた文献を見つけたので紹介したいと思います。

・・・1650年冬、当時スウェーデンには60年ぶりの大寒波があった。デカルトはスウェーデン女王の招きで講義をするためにストックホルムに滞在していたが、駐フランス大使が肺炎に罹患したためデカルトは大使を看病していた。看病のお陰でフランス大使は回復したが、デカルトが悪寒を感じるようになった。はじめの数日間は微熱であったが徐々に意識が混濁し、8日目になって肺の炎症を伴う高熱に悩まされた。肺炎であった。9日目(2月11日)の明け方、われわれの哲学者はわずか一週間余りの煩いでこの世を去った。臨終に際して、「人生と人々に感謝して、神の善性を信頼しつつこの世を去る」との身振りを何度もしたという。享年54才であった。・・・・・・・・

(山田弘明、「デカルトと医学」、名古屋大学文学部研究論集. 哲学. v. 50, 2004, p. 1-39。(上記一部をわかりやすい文章に菊地が修正しました))。

たった数日の間に急激に悪化し生命を脅かされ、極めて偉大な天才でさえ肺炎には勝てませんでした。

現代はデカルトの時代と異なり医療技術も薬も発展しています。しかし薬が全く無効であるような未知の病原体によるパンデミック発生時や、巨大地震などの大災害により医療技術・機器が全く使えない状況下ではデカルトの時代と同様に肺炎による多数の死者を生むことになるかもしれません。

2015年人口動態統計（日本厚生労働省）によれば、現代の日本でも肺炎による死亡者数は多く、肺炎は死因の第3位です。（2015年の日本での死亡者数は129万人、死因順位は、1位：悪性新生物37万人余り、2位：心疾患19万人余り、3位：肺炎12万人余り、4位：脳血管疾患11万人余り、5位：老衰8万人余り）。

患者さんの免疫力低下状態時や薬剤耐性下では現代でも肺炎は死に直結しうる病気です。皆さんの日常の健康を常に維持しておくこと、適切な薬剤使用を行うことなども大切です。

皆様お体大切になさってください。

2017年2月10日記